

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	佐々木 玲乃	指導教員 (主査)	笹川 智子

論文題目	高社交不安者における自己と他者の自己開示に対する印象評定の差の検討
------	-----------------------------------

### 本文概要

【問題と目的】高社交不安者は、他者と関係を持つことを避けたり、向社会的な行動を取らないことで、他者からの否定的な評価を引き出し、結果としてネガティブな相互作用サイクルを生じさせることが知られている (Alden & Taylor, 2004)。他者との関係構築のための重要な会話要素として、「自己開示」が挙げられる。自己開示はコミュニケーションにおいて、対人距離を縮める機能を有しているが、高社交不安者は自己開示をあまり行わず、このことが周囲からの評価を低める一つの要因となっていることが示されている (Meleshko & Alden, 1993)。しかし、これまでの研究では、高社交不安者が自己開示をポジティブなもののみならず、自己開示をするよう動機づけられているにも関わらず回避的な行動を取っているのか、自己開示を行うことに対するネガティブな認知的構えを持っているために行動が阻害されるのかについては明らかにされていない。そこで本研究では、高社交不安者が自分と他者の自己開示をどのように認知するのか調べることで、高社交不安者の自己開示行動に対する認知の影響性について評価を行うことを目的とした。

【方法】大学生 186 名を対象に、無記名式のオンライン調査を実施した。調査材料は①フェイス項目 (年齢・性別)、②Social Phobia Inventory 日本語版 (Nagata et al., 2013)、③自分の自己開示が相手に与える印象 (酒井・相川, 2019)、④相手の自己開示に対する印象 (酒井・相川, 2019)、⑤自己開示を行う主観的確率 (0-100%の評定) であった。③、④、⑤については、大学生同士の初対面の場面を想定し、「名前や出身地、好きなものの話」、「サークルや部活、課外活動やアルバイトの話」、「恋愛の話」を話題にした際の印象と確率について回答を求めた。

【結果と考察】3つの自己開示の内容ごとに、社交不安の高低と自己開示を行う人物 (自分・他者) を独立変数、自己開示の印象を従属変数とした分散分析を行った。独立変数間に有意な交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行った。その結果、社交不安高低群ともに、他者より自分の自己開示に対して得点が低くなる傾向が見られ、高社交不安者の方が自分・他者ともに得点が低くなることが明らかとなった。次に、3つの自己開示の内容と社交不安の高低を独立変数、自己開示を行う主観的確率を従属変数とした分散分析を行った。その結果、内容に関わらず、高社交不安者の方が低い確率を示すことが明らかになった。また、分布の確認を行ったところ、出身地や好きなものの話は社交不安の高低にかかわらず、ほとんどの人が 50%以上の確率で話すと言っていたが、課外活動の話と恋愛の話については、50%以上の確率で話すと考える人が、高社交不安者において低社交不安者よりも大きく減少することが示された。以上のことから、高社交不安者は、自分の自己開示は他者の自己開示よりもネガティブな印象を持たれやすいと評価しており、そのために自己開示を行う確率も低くなることが示された。このことは、自己開示をすることで、必要以上に傷つくことのないよう、自分の身を守るための回避行動であると考えられた。また、出身地や好きなものについては自己開示が可能である一方で、課外活動などの個人の特性により深くつながる話題については慎重であることがうかがえた。これらのことから、高社交不安者の自己開示を促すには、ネガティブに評価されるだろうという認知に介入する必要があること、また介入を行う際には、課外活動程度の内容からアプローチすることが有効であることが推察された。